

みらい

私は透明だ。真っ白なキャンバスですらない。

特に夢もやりたいこともなく、ふわふわ、ふらふらと息をしている。

明日の私は一体何をしているのだろうか、誰と話をしているのだろうか？

そんな近い未来でさえ想像ができない、私の話。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピッ

小鳥に起こされるような幻想的な世界はなく、無機質な電子音で目を覚ます。

朝六時……いや、早くない？自分でもびつくりする早起きで目を疑った。

今日もいつも通りに朝ご飯を食べる。いつも通り制服をきつちりと着る。いつも通りの髪型にする。

これで、将来私は本当に立派に生きていけるのだろうか？

ふとそんな疑問が私の中に浮かんだけれど、いつも通りを壊すのが怖くて掻き消した。

「おはよう」

「おはよう」

「おっはよー！」

「んう……」

朝、少しずつ人が揃っていく教室。とりあえずいつものメンバーと挨拶を交わした。(一人寝てるやつもいるけど)

そこからいつも通り、昨日のテレビ番組がどうだったとか、いい曲をみつけたとかねむいとか他愛ない会話を重ねて、ホームルームの時間を迎えるのだ。

今日のホームルームでの話は進路についてだった。

周りを見ればすらすらと進路を書き連ねる人ばかりで、何もない私はどうすればいいんだろう。と言う気持ちだけが残ってしまった。

昔から勉強しなさい、学校に行きなさい、ときもそれさえしていれば立派な大人になれるかのように教育されてきた私に進路なんてものは難題で……

ああ、せめて真っ白なキャンバスでさえあれば。

本当に何もないのだから自分の中であれこれ考えても何も浮かばないのは当たり前で、それとなく周りに聞いてみることにした。

「ねえ、進路どうするの」

「んー？私はね、専門学校に進学するよ」

「えっ？」

返ってきた答えに思わず思考が止まる。えっ、今なんて言った？

「だーかーらー、専門学校！私あんま頭良くないしさ、それなら好きなこと仕事にしたいなっ思って。」

「……そっか。すごいね」

ふと視線を上げると、口から滑り落ちた『すごいね』って言葉にその子は酷く驚いたようだった。

「なにもすごくないよ？こんなの勉強頑張ってるあんたとか他からしたらパツと見は逃げた訳じゃん。あ、私はもちろん真剣だけどね！」

「逃げ……」

「あ、そうだ。一緒にオープンキャンパス行ってみる？体験授業あるし私の言ってることもちよつと分かると思うよ」

「え、あつ、そ、そうだね。じゃあ行ってみようかな」

結局私は混乱した勢いでオープンキャンパスに行くと言ってしまった。でも、なにもない私なんかが行っていい所なのか、本当に大丈夫なのか。

そんな不安がぐるぐると渦巻いて、その日眠りにつけたのは深夜三時を回った頃だった。

「今日、友達とオープンキャンパスに行ってくるね」

「そうなの、行ってらっしゃい。別に急がすつもりはないけど……また進路について聞かせてね？」

「……う、うん」

本当に優しいお母さんだと思う反面、やはりしっかりと進路をきまないといけないのかと思うと分かりやすいほど気持ちは沈んでいった。

「おっい」

気分どころか視線まで下を向いていたようだ。声が聞こえて顔を上げると友達の色が目に入った。

「大丈夫？さっきからずっと下向いてるよ」

「大丈夫。それより、あとどのくらいで着くの？」

「え、もう学校見えてるよ」

え、と周りを見れば確かにホームページで見た校舎があった。まさかそこまでぼーっとしていたなんて……

友達はどう何回も来ているのだろう、先生ととても仲良く話している。話を振られたので

私も少し話して、書類を書いてエントランスに通された。

「また呼びにくるのでここで少し待っててくださいね〜」

「はい……………」

「……………つふふ、めっちゃ緊張してるじゃん……………」

なんかすごいクスクス笑ってくるから一発はたいておいた。

それにしても、すごい綺麗な校舎だなあ。壁には求人？企業からの依頼の紙が貼ってある。

「そーいや、今日の体験授業何にしたの？」

「え、えーつと……………歌、だったかな」

「そうなんだ〜、実際にレコーディングするんだよね？すごいな〜」

この申し込みの時に困った事がいくつもあった。まず、体験授業を何にするか。そもそもやりたい事がない私には難題だったのだが、とりあえず出来そうな歌にしておいた。

次に、入ろうと思っているコース。入学するにしろしないにしろ、とりあえず申し込む時に入れなければいけない……………ソロヴォーカルコースと悩んだけど、なんとなくギターに興味があったから楽器&ヴォーカルコースにしておいた。

「はい、えーつと……………ヴォーカルレコーディングを受ける方〜、案内するので荷物を持ってきてくださーい」

先生が爽やか笑顔で呼んだので、友達と分かれて体験授業を受けに行った。

「……………」

「あーどうだった？体験授業！」

「……………」

「……………？ねえ、大丈夫？どうしたの？」

「……………」

「つね」

「すつつつごいよかった！！私もこの学校入りたいかもしれない……………！」

本当に凄かった。気付けば私はこの学校に惹かれていた。友達も喜んでくれて、その日は最寄り駅で解散になった。

「ただいな〜」

「おかえりー、どうだった？」

「つあのね、そこ専門学校なんだけど、すごいよかったよ！」

「そっか……………なにか、そこで学びたい事があるの？」

「え……………きよ、今日は歌の体験授業を受けてきたんだけど、歌とか学びたいなっ
て……………」

「それを仕事にするつもりなの？」

「え、」

「歌を『学ぶ』って事は、それを仕事にするってことですよ？ただカラオケで良い点取るために通う訳じゃないんでしょう？」

「あ、えと……」

「……まあ、今日行っただけで興奮もしてたでしょうし、少しは頑張っただけで考えたんだろから……お父さんが帰ってきてからまた話しましょうか。」

そういうと、お母さんは少し私の様子を見てからリビングを出ていった。

私はなにか重いもので頭を殴られたように思考が止まり、その場から動けなかった。

ガチャツ、ボタン。ただいま〜という低い声、そこに加わる少し高いおかえりに声。

今までで一番迎えたくない時間が来てしまった。母は夕飯を食べながら話すつもりのように、まだ動いていなかった私に少し驚いた後、部屋に戻るように言っただけでキッチンに入ってしまった。

「……ああ、服。着替えてなかった。」

そして、やっと私の時間は動き出したのだ。

「いただきます」

「いただきます……」

大体は伝えていたのか父も事情は知っているようだった。普段よりも視線が刺さって、荷けるようにご飯を口に運んでも食べにくい。

あまりにも言い出さない私に、ずっと言葉を待っていた父が口を開いた。

「それで、進路はどうするんだ。今日オープンキャンパスに行ってきたんだろ？」

「う、えと、その」

「……お母さんがあんな風に言っただけだから言いつらいのよね、ごめんね。あなたの思っていることをそのまま言えばいいのよ。」

母のその言葉で、ずっと迷っていた言葉を口にした。

「……専門学校、行ってみようかな……って、思ったり、して」

「そうか。そこで何を学びたいんだ？」

「え、つと、」

「歌……なのよね。」

「う、うん。」

「……そこで歌を学んで、その後どうするんだ」

「その、後」

「歌を仕事にするのか？それとも、本当にただ影響されてそこに行きたいだけか？」

「つ……そ、それは、」

その通りだった。正しく後者で、それじゃ通用しないことも十分に理解している。

「…………それは…………」

ああ、また進路について考えないといけない。就職するならどう会社を選べばいいんだろう？進学はもう諦めた方がいいかな。だって勉強なんて私が学びたいと思っただけで学んできた訳じゃないし。

「…………お前」

ピタッ。

部屋の空気がまるで冷凍庫にでも入れられたみたいに固まった。

私達はその空気がこの後どう変わるのかを知っている、からこそ頭が働いてくれなかった。

「そんな気持ちで専門学校に行きたいなんて言ったのか！！あそこは夢があって、夢を追いかけるやつが行くところだ！遊び半分で行っていいところじゃない！そんな気持ちで行ったら時間を無駄にするだろう！！」

もう限界だった。これ以上頭を動かすのが嫌だった。

気付けば私は椅子を倒し、大きな音を立てて立ち上がった。

「そんなこと言われたって！！ずっと勉強しか言われてこなくて！道の選び方なんて分からないよ！！大学って言ったって別になにか学びたいことがあるわけじゃないし、住職って言われたって何かしたいかなんてわかんない！！どうしろって言うのよ！！」

ずっとグルグルしていたものをすべてそのまま吐き出した。言い終わった私は肩で息をして、目を見開いて、すごい形相をしていただろう。もう、父の顔を見る余裕なんてなくて俯いてしまった。

「…………」

「…………」

「…………、…………」

母が、なにか発そうとして口を閉じた。箸が止まったのも、全て嫌でも頭に入ってきた。

「ごめん、部屋、戻るね。」

逃げることしか今の私にはできなかった。

トークアプリで友達の名前を見つけ、開く。もうそれすらもしんどくて泣きそうになってくる。親に話したら怒られた、と伝えると謝るでもなく肯定や否定をするわけでもなく突然夜の街を見て回らない？なんて誘われた。とても驚いた。というか正直引いた。

『マジかコイツ…………』って思ったけど、なんだかすごくロマンチックな気分になってきて行くこうかなって返事をした。いつもなら夜遅くに外に出たりしないから、どうしたって

少しワクワクしてしまう。

『じゃあ夜の……一時！駅前集合ね！』

そのメッセージにわかった。と返して荷物の整理を始めた。

「……ねえ、本当に大丈夫？補導とかされない？」

「だいじょぶだつて。それより、もつと周りみて！」

「周りつて言ったつて……いつも通りの街でしょ？」

「ちーがーうー……たとえば、空！見上げてみなよ！」

「空？ただ暗いだけじ」

「もつてみて！」

もつと？もつとつて言われたつて、暗い中に何個か星があるくらいじゃ……

「……もしかして、星のこと？」

「そう！確かに星があるのつて当たり前だけさあ、都市部とかに比べたら見える方なんだよ、ここ！おばあちゃん家とかに行つたらもつとすごいんだから！」

「そうだろうけど……」

「他にも、昼と違ふところあるよ。今日はそれを探して回ります！」

……唐突なんだよなあ、この子のやる事は。でも芸能界を目指して正解だと思う、とってもいい子。

そこから駅を離れていつもの学校、大通り、幼稚園の前、色んなところを見て回つた。そして何故か土手を通つた。

「……何見つけた？」

「えー……新聞の人、コンビニの人、サラリーマン、」

「なんか人ばっかだね？」

そう言つてその子はくすくすと笑つた。あんなに頑張つて探したのに笑うつて……

「私はね、もつと見つけたよ？猫の集会、さつきとは違ふ星、小さな……うーん、神社……？」

「なにそれ」

今度は私が笑う番だつた。幼稚園の子が散歩して見つけるような、そんな小さな発見たち。

「進路つてさ、考える順番が違ふんだよ。将来どうしよう、じゃなくて将来どうなつてたのかなの。だからさ、無理に会社とか大学とか考えずに将来どんな風に生きてたいか考えなよ」

今足りないのは子供みたいなゆるい考え方じゃないの。

そういうのとどっちが早いかな、駅に着いた。じゃあねーなんて言つてその子は帰つてしまつて、一人ゆつくりと家路を辿る。

『考える順番が違ふんだよ』

『将来どうしよう、じゃなくて将来どうなつてたいかなの』

『今足りないのは子供みたいなのゆるい考え方じゃないの』

『何見つけた？』

「何……見つけた？」

人以外で見つけたもの、人を見て思ったこと、あの子の見つけたものに対して感じたこと。その中で、進路に繋がりそうなの……

違う。

この考え方が、違うってことだ。ここからゆるい考え方にしないとして事だ。

土手のさらさら静かに流れる川、幼稚園のイベントの張り紙、夜遅いのに電気がついてる新聞屋さん、まだ電気の着いたままの職員室。それを見て、私は何を感じた？

川は綺麗だなんて思った。幼稚園のイベントは楽しそうだなって思った。職員室はまだ残ってる先生がいるの？って思った。

先生は、こんな時間まで私たちの事考えてくれてるのかな。幼稚園の頃は楽しかったな、何になりたかったんだっけ。

……将来どうなっていたいかってこういう事か。

すごいストンと胸に落ちた。あの子が言ったことが繋がった。確かに私に足りないのは子供みたいな考え方だった。

将来どうなっていたいかな、私が楽しいを思える事ってなんだろう。

気付けば家に着いてて、ドアを開けたらお父さんとお母さんが玄関まで走ってきた。

どこに行ってたんだ！って怒られた。なにか悪い事に巻き込まれていないか心配してたのよって泣かれた。それが痛いほど温かかった。

この温かさはずっと包まれていたい、そう思った。

* * *

「あのね、私教職に就きたい」

私はあのプチ家出をした日から半年、悩みに悩んだ。私のやりたい事、なりたい自分とは何か。ふと悩んでいる間ずっと静かに待って支えてくれた両親と大切な事を教えてくれたあの子が浮かんだ。

そして、プチ家出から帰った時の家族の温かさが甦ったのだ。

それから何度も考えて、幼稚園や小学校の先生に辿り着いた。何気ない事の大切さとか、他の子が進路に悩まないようにあの子が教えてくれた事を私なりに伝えていきたいって気持ちが生まれた。

今、それをやっとな打ち明けたのだ。

「いいんじゃない？」

「っえ、」

「あなたがきちんと悩んでたのも知ってるもの。いいと思うよ、お母さんは」

泣き出してしまった私を、お母さんは『お父さんにも話さなきゃね』なんて言いながら抱きしめてあやしてくれた。

この、温かさを私も与えられるようになりたい。

その日の夜、お父さんに話した時は『勉強も頑張ってきたし大丈夫だな。頑張りなさい』って言うてくれた。学校は決まってるのか？なんて気が早くて、私が思ってるよりもずっとずっと優しくかった。思えば、ずっと人には恵まれて生きてきたのだ。

——そして何年も経った春。私はスーツを着て、パンプスを履いて、校門をくぐった。